

## 第2回「南三陸町まちづくりワークショップ」

○日時：平成18年5月25日（木）19：00～21：00

○場所：南三陸町役場行政第2庁舎2階会議室

○次第：1. 開会

2. ワークショップ

テーマ1 地域の環境と暮らし・なりわいのあり方について

委員をA・B2つのグループに分け、同一テーマを別々に話し合いました。

### <Aグループ>

Aグループ…後藤一磨・阿部長記・佐藤洋・佐藤すみ子・佐藤美和・高橋昭夫・山内完二

#### ○議論の進め方について

まず、目標を定めて、そこから具体的な課題を検討する方法が良い。そのため、まちの理想像を考えることを行うこととした。

#### ○望ましい町の将来像について

各メンバーからは、次のような将来像に関する意見が出された。

- ・恵まれた自然環境は次世代に引き継ぎつつ、暮らしの魅力を高め、若い人が住みつづけある町であり、外からも人々を惹きつける町でありたい。
- ・女性や高齢者が働きやすい町であることが重要。地域の雇用の確保という観点で、地域を守るという発想から社会的責任を果たす事業を行う企業が多くある町でありたい（→そのために企業家がネットワークをつくっていく必要がある）。
- ・自然の豊かさは本町の強み。これを域内循環という形で活用することで活性化に結びつけていける町でありたい。→南三陸町型スローライフを実現できる（している）町でありたい。
- ・まちづくりに対して、町民一人ひとりが汗をかく町でありたい（このことが個々人に暮らしの達成感を育むことにつながっている町でありたい）。
- ・人間の暮らしの根源にある食・健康といった価値を共有することは多くの住民を巻き込むうえで重要。これらの要素をまちづくりに活用し、生きることを実感できる町にしていきたい。

Aグループのメンバー各人の議論に共通する要素としては、次のようなものがある。

○市場主義経済から非市場主義経済（連帯型・協同型経済）への志向

○地産地消、域内循環→地域の自治力の再生、地域自給の志向

そのために必要な取組としては、次のような意見が出された。（まとめると）→

※誰もがバラバラであるより、地域社会として連帯・協同し、社会全体がよくなることが大切。そのためには、人々間の信頼関係を高めていくことが必要（ソーシャル・キャピタルの拡大）。

※地元の技術や知恵は、長い時間をかけて実証されてきたこと。これを活用して活かす発想が必要。

※これらについては、従来の価値観を大きく展開させていくことが必要となるため、人的資源の育成

が必要（学校教育まで含めた、大人も子どもも含めた人づくりが重要）。

### ○次回の議論にむけて

前回は上記まで時間が来たため、今回は次のような観点で、議論を深めていくこととした。

南三陸町の町民一人ひとりが、これからどのような価値を共有し、それを高めていくために、どのような暮らしを一人ひとりが心がけ、実践していかなければならないか⇨南三陸町型スローライフというものは、どのようなものになるのかを議論し、その実現のためには、第1次産業は現在のような状況から、どのような方向を目指すことが必要なのか。商業をふくめた暮らしの質的な豊かさを高める生活サービスは、現在のような状況から、どのような方向を目指すべきなのかを議論していくこととしたい。

以上

### ※参考：スローライフ

特に定義がある言葉ではないが、ここでは、単なる田舎暮らしといったものではなく、次のような意味を持つ言葉として捉えたい。

○経済の高度成長時代の価値観とは違う価値観で暮らすということ。より効率的なこと、より大きいこと、より強いこと、より早いことなどを競い合う暮らしではなく、ゆっくり、ゆったりと、豊かに暮らすということ。

○「スローライフ」の「スロー」は、「エコロジカル（生態系によい、環境によい）」という言葉や「サステナブル（永続性のある、持続可能な）」、さらには「ローカリー（地域の、伝統的な）」という言葉に置き換えて考えてみる。

### ※発想のヒント

残すべき計画＝これまでの総合計画は、開発する計画であった。人口減少社会においては、開発する計画から「残す」計画への発想の展開が必要。南三陸町においては、何を次世代に残すべきなのか。自然はもとより、そのほかに残すべきものは何か。これが明らかになれば、町民が共有できる価値になるのではないか？[以下、新聞記事参照 破綻をこえて（9） 無事な世界つくる基盤（内山節）2005/12/10, 信濃毎日新聞朝刊]

哲学の構想力（99）

＝破綻をこえて（9）無事な世界つくる基盤（<sup>うちやまたかし</sup>内山節）2005/12/10, 信濃毎日新聞朝刊

いまから五年ほど前の、ちょうど二十世紀が終わろうとする頃、群馬県の「新総合計画」である「二十一世紀プラン」の策定に加わっていたことがあった。「新総合計画」は、普通は五年に一度つくられる。ところが群馬県ではこのとき、百年計画をつくることにした。短い時間幅で将来を考えるのではなく、遠い未来を見据えながら考えてみよう、という発想である。

といっても、百年後は、かすんでしまうほど先のことではない。おおよそ、いま生まれた子や孫が高齢者になる頃のこと、と考えればよい。

面白かったのは、五年計画が百年計画に移行したとたん、基本的な発想が変わったことである。五年計画だとどうしても「つくる」計画になる。今日なら高度情報化社会をつくるとか、先端産業を育成す

る、高速交通網を整備する、環境や弱者にやさしい風土をつくる、といったことである。ところが百年計画になると、「つくる」ことのほとんどが意味を失ってしまった。なぜなら、百年後に情報がどのようなかたちで伝達されているのかも、主要な交通手段が何になっているのかも、誰にもわからないからである。そればかりか、情報という概念や、移動という概念自体が変わってしまっているかもしれない。今日の先端産業など、百年後には、本や映像でしかみられないものになっているだろう。現在の発想で何かをつくってみても、おそらく百年後には意味がなくなっている。

○ ○

このような議論をへて、「二十一世紀プラン」は、「つくる」計画から「残す」計画へと変わった。百年後の人々が破綻なく暮らしていけるようにするには、何を残しておかなければいけないかが、計画の中心になったのである。

自然とともに暮らす風土を残す。地域のコミュニティを残す。暮らしをつくる手仕事を残す。…。もちろん「残す」ためには、再生しなければ残せないものもたくさんある。

こんなふうに考えていったとき、私たちは「仕事」について何を残すべきなのだろうか。前記したように「先端産業」などといっても、百年の時間幅で考えれば意味がない。「二十一世紀プラン」には、産業政策として次のふたつのことだけが書かれている。ひとつは農業、林業などの一次産業は守り、残すということである。たとえ百年後がどんな社会になっていたとしても、農業などの一次産業が荒廃していれば、その時代の人々が幸せに、安心して暮らせるとは思えない。

もうひとつは次のようなことである。日本の近代化がすすんでからは、人々が真面目（まじめ）に働けば働くほど、自然や環境がこわれ、地域社会がこわれ、ときに家族の関係までがこわれるという現実が進行した。これは私たちにとっての悲劇である。ゆえに、私たちがどんな働き方、仕事のシステムをつくったら、人間が真面目に働けば働くほど、自然や環境が守られ、地域社会が生き活きとした社会になり、豊かさが感じられるような家族が生まれていくのか。そういう働き方をみつけだすことが、これからの群馬の産業、労働政策の基本にならなければならない、と。

労働は、無事な世界をつくる基盤でなければいけないのだと、私は思っている。農民が作物をつくり、職人が物をつくり、商人が商いをする。それらの労働によって、無事な世界がつくられていく。こんなイメージの延長線上に、現代世界もつくられていたら、私たちの社会はどれほど良質になっていたことだろう。

○ ○

しかし、いまの現実とは違う。むしろ人間の労働が、大事なものをこわす方向で作用している。そんな労働が、あまりにも多くなった。真面目に働くことによって、たとえば収入がふえるといったかたちで個人は満たされることはあっても、社会としてはこわれていくものが多い。この構造のなかにまき込まれていることが、現代労働の悲劇なのである。

そうになってしまう原因は、現代の私たちの仕事が、さまざまな「権力」とでもいうべきものと、どこかで結びついているからなのかもしれない。市場競争とは、市場での権力を確保しようとする争いである。出世とは組織内での自分の権力を高めようとすることであり、いまではお金自体がひとつの権力として機能している。

とすると、このようなさまざまな「権力」と結びついたとき、私たちの労働は、無事な社会の基盤ではなくなったのかもしれない。（哲学者）

## <Bグループ>

Bグループ…佐藤かつよ・梶原仁一・兼田茂・昆野慶弥・太齋京子・元木静雄・渡辺由紀子

Bグループでは、観光と商業をキーワードにまちの課題や問題点を話し合った。その結果、をまとめると、次のようなまちなかの理想像とそれに向けた手法が導かれた。

### <まちなかの理想像>

#### ◇日常的に楽しく買物が出来るまちなかのしくみづくり

- ・欲しいと思える商品が少ない。
- ・買物が楽しめない（買物のプロセスの楽しさ、コミュニケーションの楽しさ）。
- ・産業市のような活気や買物の楽しさが日常的に味わえる商店街が欲しい。
- ・大規模店舗がまちの近郊に進出し、まちなかが寂れることは避けたい。

◇高齢者が歩いて用を足すことができるまちづくり

◇観光や交流と連携した商業の推進<旅行者も楽しめる商店街>

→ \*活気あるまちなかづくり<町民に支持される商店街・旅行者も楽しめるまちなか>

<まちづくりに向けて：外に向かって開かれたまち ～心と産業の活性化～>

◇オープンマインドのまちづくり

- ・よそ者や新しいことへの挑戦に対する意識の変革
- ・よそ者を受け入れたいが、一度受け入れられればあたたかい気質
- ・商業や観光に共通するおもてなしの心の育成<関連事業者だけではなく町民全体で>
- ・外から人を呼び込む（観光・体験学習・移住）取組みの推進

→ \*まちの資源を活用した定住・観光の促進により、よそ者との交流する機会の創出

◇まちとしての総合力の育成

- ・観光、交流、商店などの個人的な取組みはあるがまちとしての総合力がない。
- ・良質な資源はあるが、まちのブランドとして確立されていない。

◇業種間・異業種間の円滑なコミュニケーションの促進

- ・観光は観光、商業は商業の縦割りで横のつながりがない（連携の促進が必要）。
- ・同業者の集まりでも研究活動などが行われていない、他業者がどのような取組みをしているのか情報の流通がない。

→ \*まち内部での競合から、まちの外との競合に向けて個人を活かす組織や環境づくりへ

◇まちの資源への付加価値付け

- ・海の幸・山の幸といった食を中心においた観光業や商業の振興
- ・恵まれたまちの資源を有機的に結び付けていく努力
- ・資源の価値に気づく努力、認識の改め
- ・南三陸観光には自転車に適している。

→ \*豊かな資源に気づき・まちとしての活用の促進<“食”や“健康”からまちを見直す>